

昭和三十三年十一月三日

郷土誌資料第一集

大和町のむかし  
城山遺跡

大和町教育委員会

- 1 発掘参加者 県教委柳田主事、鎌田、原田、池田、本橋、塩原、山浦、宮原、小谷野、笹沼各調査委員、瀬谷教諭、大和中学校生徒徒二年生(含一年生)三十名、室賀教育長及び教委事務局職員。
- 2 発掘用具 シヤベル 一〇、 鍬 三、 移植こて 一〇、 竹べら 三〇、 箒 三、 竹箒 三、 箕 五、 なた 二。
- 3 遺物整理用具 りんご箱 三、 みかん箱等 五、 封筒大小・荷札・新聞紙・マジックインキ赤黒。
- 4 調査用具 巻尺・水糸・グラフ用紙・クリノメーター・平板測量具一式・写真機
- 5 日程 七月二十九日(火) 発掘上の諸注意、発掘開始  
 七月三十日(水) 午前中で発掘作業打切(午後他の教委行事)  
 七月三十一日(木) 発掘作業  
 八月 一日(金) 発掘完成、測量  
 八月 二日(土) 整理、埋戻し作業

毎日午前八時より十一時、昼休み三時間、午後二時より四時まで作業、作業間午前午後各一回休憩。  
 三、発掘日誌

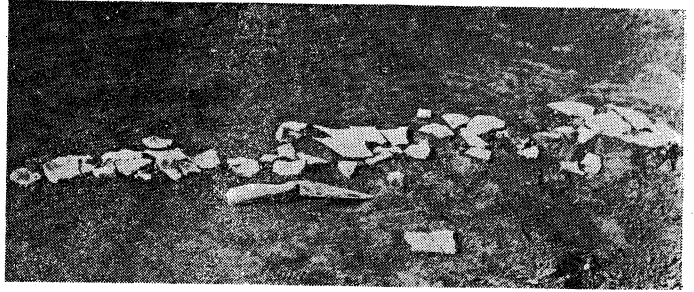
昭和三十三年七月二十九日 曇 後晴

前日までは連日降雨があり、発掘に危惧を感じたが、当日になるとまことに好都合に晴れ間が出て、間もなく真夏の太陽の照りつける好天となった。

発掘初日であるため、午前九時三十分を開始、柳田主事より白子小学校々庭の遺跡について概略の説明と、発掘上の注意があつて発掘にかかる。先ず全員を三班に分け、分担をきめる。

- 第一班 中学生一〇名 主任笹沼、塩原
- 第二班 “ “ “ 小谷野
- 第三班 “ “ “ 宮原、原田
- 測量 “ 二名 “ 原田、瀬谷

各班は指定された発掘区域に試掘溝を設け掘り進める。



(第一図 第二号住居土器出土状況)

第一班 直線状をなす濠と考えられる区域を発掘する。この箇所は相当に表土が深い。土器片少量出土する。

第二班 堅穴の一部を発掘し、これに伴う土器片も次々に発掘される。そのうち二箇所の一連の土器片の配列方向は共におよそ南七〇度東である。これは昨年校庭整地の際、グレーダーによって押しつぶされた結果かと考えられる。土器片は弥生式のものである。ローム(赤土)が真赤に焼けている「ろ」の跡も認められ、ほぼ隅丸方形の住居跡の外ぼうが確認された。(二号住居跡)

第三班 第二班より約二十米西方の区域の発掘を開始、弥生式土器片が出土する。午後に至り「ろ」跡及び一箇の柱穴を確認する。ここは円形の比較的小型の住居跡である。(一号住居跡)

七月三十日(水)

晴

炎熱焼くが如き絶好の日より。第一号第二号住居跡の床面をあらひ出す。濠は更に掘り進める。

第二号住居跡の柱穴三箇を認める。なお床面の一部に立木を掘り取った跡がある。

午後第一・第二号住居跡の床面を更に削り、三十分の一実測図を作製する。

七月三十一日(木)

晴

暑気甚しい

住居跡第一・第二号及び濠のセクションを作製する。午後出土品の整理を行う。

八月一日(金) 晴

本日で一応発掘は終了し、今回発掘の住居跡を含めて、この校庭一帯を「城山遺跡」と呼称することに決定する。

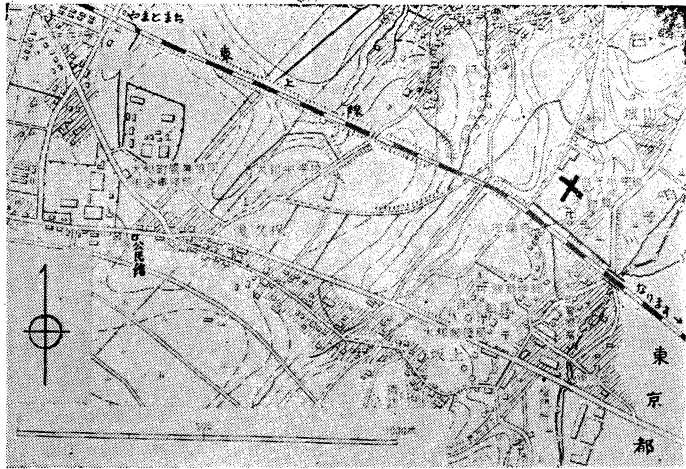
本日もまた炎々として頭上に太陽が輝く。測量班は校地全域の測量を完成し、住居跡を記入する。貴重な資料である故、発掘住居跡を八月二日より約一週間町民一般に公開供覧するため、住居跡に柵を立て解説を掲示する。発掘住居跡を残し埋没の作業をする。

八月九日(土)

晴

二つの住居跡を埋め戻し、住居復元の希望を残し、ここに「城山遺跡」発掘を完了する。

(富岡吾良)



(第二図 遺跡附近図)

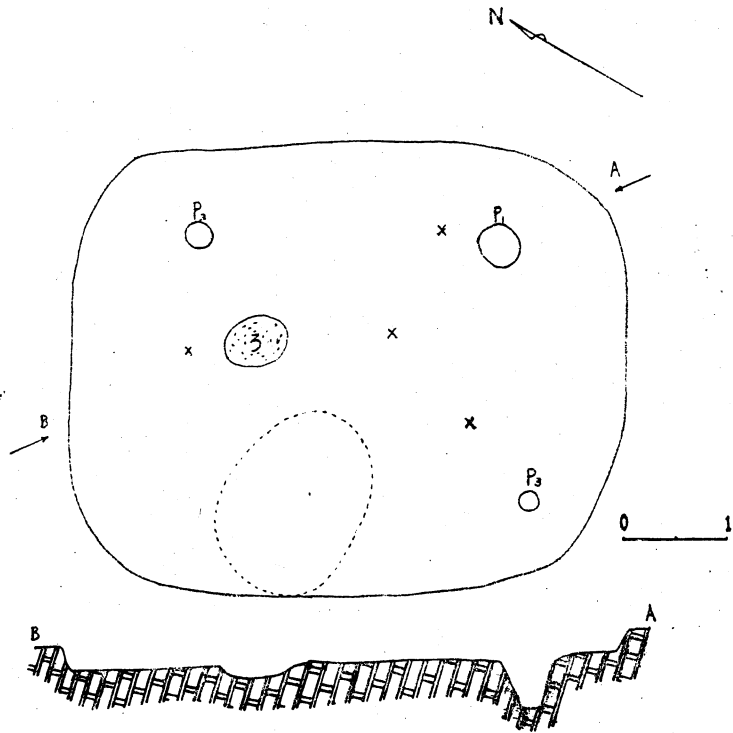
大和町は埼玉県の南端に位置し、東京都に接している。東南を流れる白子川を中心とした沖積地が町のある台地に支谷となつて入りこみ、一種の波状平野を形づくっている。台地は関東ローム層からなり標高三〇〜四〇メートルある。白子川は小流ではあるが、台地の各所から湧出する水を集めて、荒川に注ぎ、一年中水の断えることなく、むしろ大雨のときには洪水をおこし、町に相当な被害を与えている。この白子川にのぞんで舌状に細長く突出した台地上の南東地区に城山遺跡がある。水の便もよく、日当りのよい絶好の居住地と考えられ、事実、縄文前期から各時期にわたる住居跡等各種の遺跡が発見されている。午房、白子、吹上等に散見するのがそれである。特に白子貝塚は有名であり、大山柏氏等が調査を実施している。

今日では都心から二〇分、成増と共に住宅地として栄え、又工業地帯としても急速に発展しつつある。一方、都周辺のそ菜等の給源

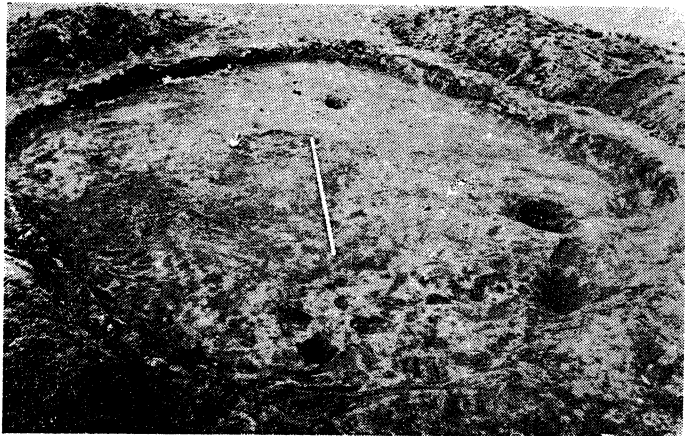
(参考 小谷野信太郎研究報告)

地の一つであり、近距離を利しての発展が期待されている。

(第五図 第二号住居跡実測図)



(第六図 第二号住居跡)



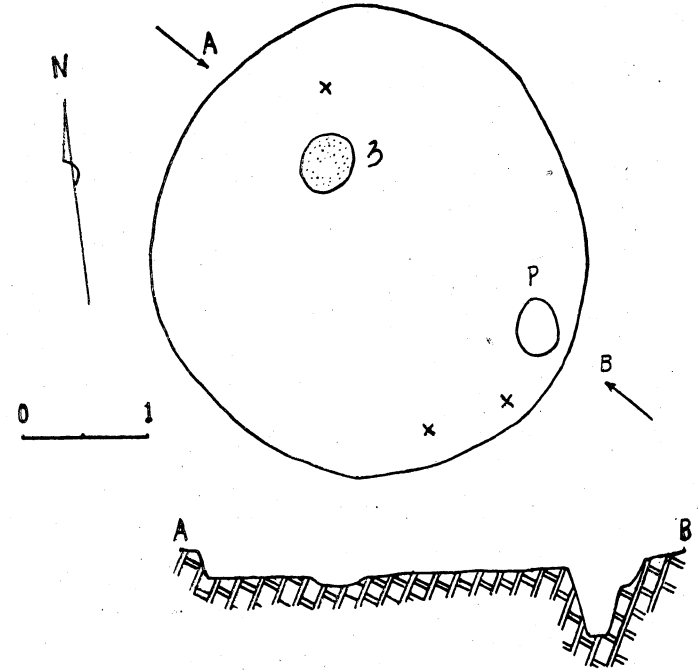
られ、中央より北西寄りの所に径約四〇センチメートルの「ろ」が掘り凹められてあり赤く焼けていた。「ろ」の型は「だ円」に近い円い形をしていた。

ピット(穴)は住居跡内の南西の壁に沿って一個あり、長径四五センチメートル、短径三三センチメートル程の「

#### 四、住居跡

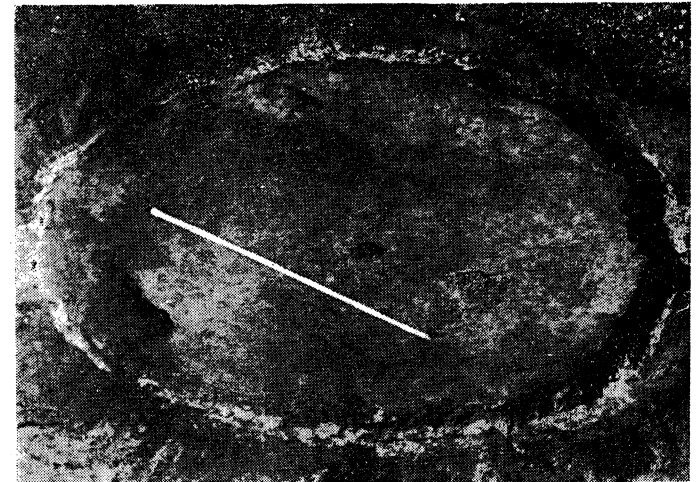
##### 第一号住居跡

堅(たて)穴のプラン(大きさ)は、直径三・六〇三・七メートルほどの円型をし、深さはローム層(赤土)に二〇センチメートルほど掘りさげてあり、床面は南西に向ってゆるやかな傾斜をしていた。床面はかたく踏みかため



(第三図 第一号住居跡実測図)

(第四図 第一号住居跡全景)



だ円型」をなし、深さは床面から約六〇センチメートルで、柱穴と推定される。

遺物は表土の下（堆積した土）と、床面で多数出土したが、いずれも破片で、完全なものも出土しなかった。

### 第二号住居跡

第一号住居跡と違い、縦五・三メートル、横四・三五メートルの方型に近く北西に稍長い矩形をした、隅のまるい、隅丸（角丸）型住居跡と呼ばれるものである。床面はローム層から約二七センチメートル掘りさげて平らに踏み固められてあり、「ろ」は中央よりやや北寄りの所に掘りくぼめられてあり、四五センチメートル×六〇センチメートルのだ円型をして、周囲は赤茶に固く焼けていた。

柱穴は全部で三個を数え、大きさは別表の如くである。もう一個西北隅にあったものと思われるが、どうしても見出すことができなかった。恐らく大木を植えた時にこわしてしまったものと思われる。

床面からは多数の土器片が出土したが、表土から近いので、長い間に破かいされてしまったものらしく、完全なものはない。A地点で出土したものはまとまっていたので、あるいは復原（もとの型）可能と思われる。

その他、灰とか木炭も少量検出したが、これは「ろ」の中から掻き出したものと考えられる。

	径	深さ
P 1	五二	四五
P 2	二四	二〇
P 3	一八	三五

(単位センチメートル)

以上堅穴住居跡について記したが、従来県内ではこの時期のもの（弥生式後期）は方形・長方形で、中には隅丸型も発見例があるが、円型の住居跡というのは初めてである。

## 五、溝

校舎の中央部より正門の方向に校庭を横切っているのが認められたので、この発掘も行った。巾は途中で狭くなっている所もあるが、大体一・一メートルあり、深さも場所によって違うが、七〇〜八〇センチメートルあり、

真黒な腐植土が、黄褐色のローム層に落ちこんではっきりとU字型の溝が認められた。溝は直行し中央部でT字型に交わっていた。全貌を突きとめることは都合によりできなかったが、溝の中から出土した土器はほとんど縄文式土器（中期）で、少量の弥生式土器も発見している。

## 六、その他

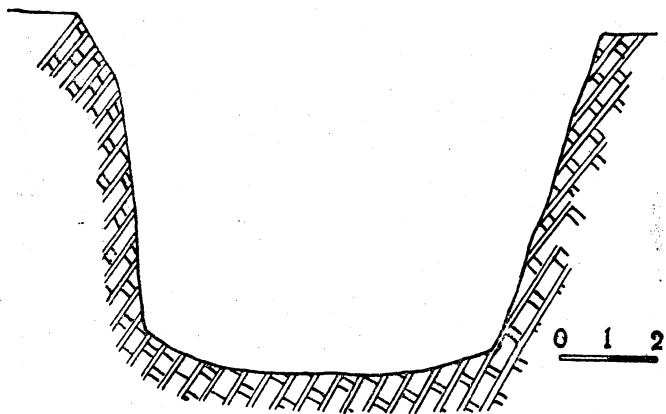
今回発掘した住居跡等のほかにもまだいくつかの遺跡が存在していることが確認されている。それらをボーリングで探査してみると大部分が住居跡であることがわかる。

校庭の北寄りにある遺跡は縄文式時代の前期に属する関山式と呼ばれる土器片が多く出土したので、恐らくこの時期の遺跡と推定される。

## 七、遺物

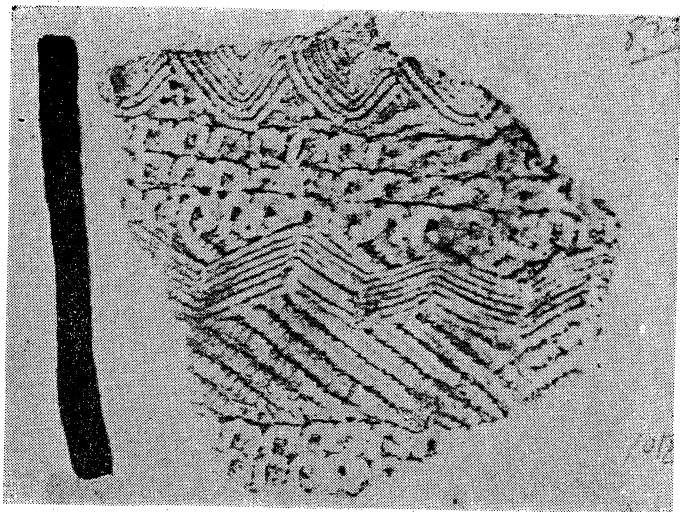
### 一 土器

今度の調査では二個所の住居跡を発掘したが、住居跡内は勿論その他でも多数の土器片を発見することができた。出土した土器は大きく縄文式土器と弥生式土器に分けることができる。このうち発掘

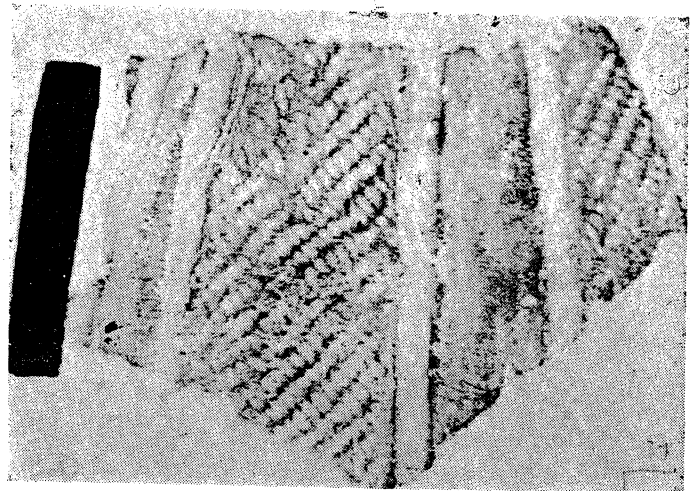


(第七図 溝断面図)

した住居跡と関係のあるのは弥生式土器である。



第十図 縄文式土器(関山)



第十一図 縄文式土器(加曾利E)

煮沸用に使ったものと思われる。

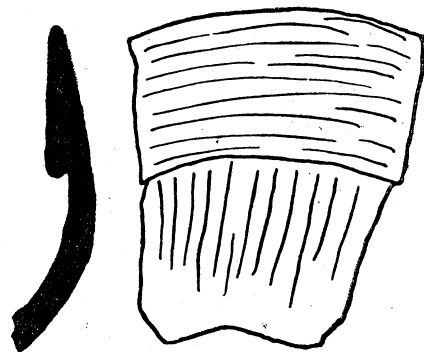
(2) すべて後期の前野町式に含まれると思われる。  
第二号住居跡出土の土器

(1) 複合口縁土器

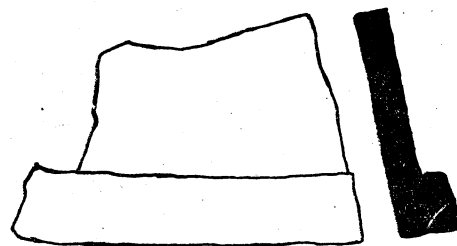
赤褐色をなし、複合部は横に頸部は縦に櫛目文が施してあり、口縁の内側にも斜上に向かって櫛目文がしてある。(第八図)

(四) つぼ型土器の一部と思われるもので、頸部に沈線条痕文、細斜縄文を施し、そのうえに粘土のひもをつけたような土器がある。弥生町式と呼ばれるもので、これとは別に頸部の周囲に直径六〜七ミリメートルほどの丸く平たい、ちょうどボタンのような形を附着したのもある。

(イ) 複元可能と思われる「かめ」は、口縁部に刻目があり、口径推定二八〜二九センチメートル、器厚七ミリメートル、茶褐色を呈す。整形はあらいが、焼成・胎土はよく、腹部以下は煤で真黒になっている。恐らく



第八図 弥生口縁一部(第二号住居跡出土)



第九図 弥生脚の一部(第一号住居跡出土)

1 弥生式土器

(1) 第一号住居跡出土の土器

すべて破片である。焼成よく、七〜八ミリメートルの厚さで、かめの口縁部、台付土器の脚部等、いずれも色は茶褐色をして、刷毛・ヘラで整形がしてある。

口縁部のうち上端部に刻目のあるものがあり、口縁の内側、外側とも櫛目文のしてあるものもある。また脚部のうち黒灰色したものは、九図のように二重になっており、焼成・胎度共すぐれたものである。

## 2 縄文式土器

縄文式土器は校庭のあちこちから出土するが、大体二つの時期に分類できる。

前期 (関山式)

中期 (加曾利E式)

前期の土器は黒褐色をなし、植物繊維を多量に含み、文様は複雑で、縄文・斜縄文、流線文、細竹を二つにわってその先で突刺したもの、丸い「いぼ」のようなものを附着したもの、沈線を組合わせたもの等がある。低い温度で焼いたもので、もろく、かけやすい。深鉢型、かめ型土器の破片と推定される。

中期の土器は直溝の中からいくつか出土した。器厚が一センチメートル程あり、大型土器の破片らしく、縄文と、すり消文、沈線を主とした模様が多く、色は赤褐色が多い。先の土器とくらべ、焼成よく胎土もよい。

## 二 その他

第二号住居跡からはツメタ貝が一ヶ、底辺の凹んだ三角形をした打製の石鏃(ぞく)一ヶを発見している。

第一号住居跡からは磨製石斧の一部が出土したが、詳細は略する。

註

土器についてはもっと実測図、写真等をのせると共にくわしく説明すべきであるが、種々の都合により簡略にした。詳細については後日、記したい。

## 八、むすび

今度の調査で、出土した土器やその他の遺物等から考えて、この城山遺跡は縄文式時代の前期から(今からおよそ五・六千年前)中期の頃まで一つの住居群、すなわち集落をなしていたことが推測できる。それが一たんすたれて、再び弥生式時代の後期になって、集落地となったものと思われる。(或は縄文後期の遺物も、もう少し精しく附近を

探ったならば、発見することができるかもしれない。そうなれば縄文前期からずっと居住地として続いていたといえる)

当時はまだ石器を使用した頃、すなわち、石器時代のことであり、未開の原始林にかこまれ、海の入江に面した大和の台地に住居をかまえた先人は、海の幸、山の幸を求めて歩いたものである。白子貝塚、吹上貝塚はこの頃の人たちの食べがら、不用になった日常用具等を捨てたごみ捨て場である。それから長い年月がたち、海の水もずっと南にさがると共に、各所から湧き出る水を集めて、低地を流れる小川がいつの間にかできあがった。これが白子川である。白子川は周囲の谷間を削りながら流域を肥沃な沖積地に変化させていった。この沖積地は弥生時代になると、水田に利用されるのである。

弥生式時代は農耕技術が進み、水田耕作が一般に普及した時期である。発掘した住居跡はこの頃の人々の住んだ家である。当時の家には床や壁などというものはなく、赤土に掘りさげた床をふみ固め、枯草や、藁、などを敷いて質素な暮らしをしていた。屋根はかや等でふき、地面までおろし、壁の代りとした。ろは調理をする場所であるとともに冬の間の暖をとる設備でもあった。

城山の先人たちは長い月日の間、雪が降り木枯の吹く冬、炎熱やくが如き夏、小鳥さえずる春、紅葉の秋と、全く自然を相手の平和な暮らしをいとんでいたことであろう。

自給自足の生活は必然的に日常用具等もつくるようになった。素朴な土器、優美なつぼ、その他服飾品等にいたるまで、土、石、木、骨等を材料にして作り出した無名の芸術家でもある。それらは現在では大部分が地下に埋もれているが、これらの一つ一つが当時の生活の有様を物語っているのである。(柳田敏司)

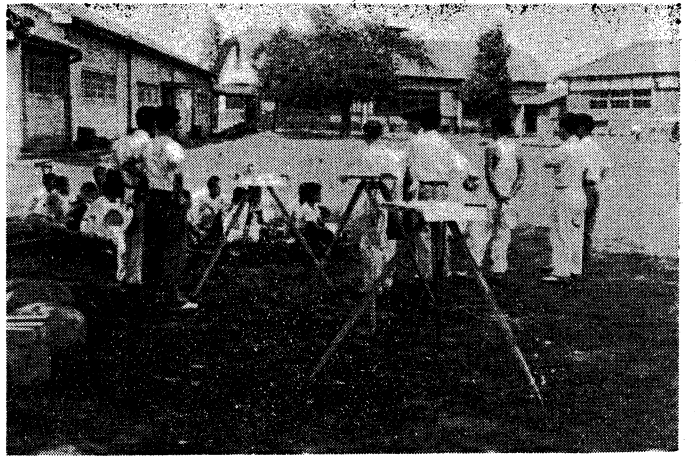
## 古代住居跡を発掘して

大和中 二年B組 和 光 正 司

七月二十九日、林間学校の疲れも忘れ、古代のことを知ること喜びを感じ、希望に胸をふくらませながら白子小学校へいそいだ。学校につくと、もう皆きていた。

シャベル・スコップ・トンガ(くわ)・竹べら・三本グワなどを手にし、柳田先生のお話を聞き、三班にわかれ、





運動場の指定の場所にちらばっていった。一班は西南、二Bを中心とする二班は南、三班は西北、というL字形の線で掘り始めた。

土器や住居跡が出てくるようにと期待しながらトンガで掘り起すと、赤土まじりの土に掘ってしまった。さっき赤土は掘らぬようにと注意されたばかりなので、あわててスコップに切りかえ、けずり取るようにしてほった。黒土だといっても、一、二センチメートル位ですから大変です。いくら掘っても住居跡どころか土器のかけら一つでてこなかった。

発 「これは麥だ、違うんじゃないか。」

と、小谷野先生がいわれたので、ぼくたちは一応掘るのをやめた。柳田先生に相談をもちかけると、先生はT字形をした鍬の棒で所々をさし、

二 「今掘っている所より三、四メートル離れている所を掘って見てください。」と、言われた。前よりも東によった所だ。

第十 後でわかったが、この棒をさし、固くぶつかった所でぬくと、先についた赤土で赤土の深さがわかり、住居跡の見当がつくそうです。

こんどは気分一転サクサクと掘り始める。

「カチッ。」

にぶい音が隣りでした。岩夫ちゃんが、

「あった。」

と、さげんでしゃがみ、腰にさしていた竹ペラで掘り始めた。指定の場所の東側のはじです。手伝ってぼくもいっしょに掘った。おうど色でしめられているためすぐくずれずれる。表面には縄模様のはっきりとついていた。縄模様といっても、ななめによこにたてに規則正しく線がついているだけで、縄をおしつけたような模様はそんなになが、あきらかに縄文式土器である。

そこを初めとして十数個かたまってきました。皆かけらである。

「カチッ、カチッ、カチッ。」

と、音する。そこいらじゅうに土器のかけらがでてきた。縄文・弥生式次々と出てくるが、みな完全なものはない。他のグループはまだなにもでないらしく活気がない。だんだんおもしろくなった。掘ればどんどん出て来る。いっしょけんめい掘っているとつい終った。反対側の赤土が見えて来たのである。こんどはまわりの黒土をくずし赤土を出した。方形の住居跡のはっきりでてきた。いろいろの跡はまん中にあると思っていたが、中心より北側であった。赤くやけた土すみのあとらしいものもでてきた。柱の穴、これは想像よりいくぶん大きかった。この穴からも土器のかけらが出てきた。一個の土器のつぶれたものらしい。穴の深さは五〇センチメートル位でした。床・壁は古代の人の苦心を物語ってデコボコしていた。

全体を見ると意外に小さかった。これで一家族の人々が住んでいたのかとふしぎに思った。

### 住居跡発掘

二 A 石 川 登 喜 枝

夏休みのうちで、私にとっていちばんの楽しみは住居跡発掘でした。発掘の日数は四日間でした。

でてきた土器は縄文式でしたが、彌生式土器らしい土器も少しでてきたようです。

ほったらすぐに土器のできたところと、なかなかでないところがありました。それは土地の高低をなくすために土の移動をしたためです。土器のたくさんでてきたところに、住居跡らしい深さ二、三十センチくらい半径一メートルくらいの円形をほりあげました。

あとのは四角の角にまるみをつけたような型です。これも、三日目には完全にほりあげました。柱のあと、いろいろのあとではっきりほることができたのは、ちょっとびっくりしました。

いろいろの灰・土器・二つの住居跡、これだけが四日の間に発掘することのできたものでしょう。住居跡は弥生式だそうです。

雨あがりのために住居跡がはっきりわからなかったそうです。

天候のよい時は住居跡の土だけが黒くのこるのだそうです。



それがどうしてなのかわかりませんが、  
このような機会がまたあったらよいのになあと、つくづく思いました。

### ❁あとがき

郷土誌の資料第一集がこゝに生れた。一見小冊子ではあるが、文字通り多くの人々の汗の結晶である。  
発掘の指導からこの研究調査報告書の執筆編集まで、多忙にも拘らず終始熱心に尽力された県教委柳田主事に深甚  
の謝意を表す。

秋たけなわの肌寒さをおぼえる今、思い起してもなお暑さを感じられる程の真夏の炎熱を物ともせず、発掘に従事  
した調査委員各位及び大和中生徒諸子に心より感謝する。

なお本冊子中、「郷土誌」と「郷土史」の別について一言すれば、「史」は歴史的な意味を表わし、「誌」は更に  
加えて地誌的な意味も含まれるものと解されたい。

表題文字は室賀教育長をわずらわした。

菊花かおる文化の日「富岡記」

昭和三十三年十一月三日 印刷発行

非売品

編集兼  
発行者 室 賀 茂 美

板橋区上赤塚町四九

印刷所 高知堂小畑印刷所  
発行所 大和町教育委員会